

バリアフリーについて



幡羅中学校3年 野村 和歩

私が障害者のことについて考えるきっかけとなったのは、学校で毎年行なわれている人権週間の講演会でした。昨年は、パラリンピックに出場したこともある、車イスバスケット選手の塚本さんのお話を聞き、今年は、パツファロー号に乗って写真をとる、田島さんの講演を聞くことができました。お二人とも、障害があっても毎日真剣に楽しく生きていらっしやいます。

しかし、町には段差や放置自転車など、障害者の暮らしていく要素がたくさんあります。外に出ても辛いことばかりでは、誰だって外に出たくなくなるはず。障害者にもっと優しい町づくりができないものでしょうか。

私の母は、手話を習っています。手話は、耳の不自由な人が話すとき言葉として使うものです。耳の不自由な人が身近にいるわけはありませんが、母は興味を持ち、「人の役に立ちたい」という思いもあってか、手話を始めたのでした。母は、テレビの手話放送をよく見ています。ニュースなどで、画面の端に手話で話す人が映っているのですが、私には意味が全くわかりません。でも、母にはわかり、それがまた勉強になるのだと思います。そして、もっと学びたいという気持ちになっているのだと思います。手話がわかるのは、うらやましい気がします。

私は、小学校六年生のころに、学校の体験学習で、点字を習ったことがあります。点字は目の不自由な人の文字です。このときは、車イス体験など、いろいろな選択肢があったのですが、私は点字を選びました。それ以前から点字に興味があり、読めるようになれば何かの役に立つかも、と思ったのです。

私は、点字の歴史を知り、読み方や打ち方を学びました。点字は、専用の道具と紙を使って打ちました。その道具は初めて見る物であり、紙もふだん使わないような、厚い物でした。

点字は、町のいろいろなところで見つかります。家の中では洗濯機についていたし、駅の階段の手すりや、横断歩道にある身体障害者用の押しボタンにも見つけられました。でも、探さなければ見つからないのでは、やはり点字は特別なものなのだと思います。

私は、体の不自由な人や、それに関わる手話や点字、車イスなどが、特別なものでなくなっただけです。「体の不自由な人は少ない」という思い込みのため、障害者用の駐車場に平気で車を停めたり、点字ブロックの上に物を置いたり、といったことが出てくるのです。手話も、使える人が多くなれば、耳の不自由な人が、たくさんの人と話をすることができるようになるでしょう。点字がもっと増えれば、目の不自由な人が外に出ても、とまどうことなく歩けるようになるでしょう。

障害者のために考え出されたものが理解され、どこにでもあり、だれもが知っているようになれば、障害のある人たちは、より安全に、安心して外に出られるようになるでしょう。私は、そんな世の中になってほしいと思います。

夢

なかるべからず

鈴木 弥生さん



笑顔が輝く交差点

78万人

日の乗降人員約78万人。東京駅や品川駅より多いターミナルステーション、JR東日本横浜駅。四方八方から人が集まり、見知らぬ者同士が一期一会の感慨に浸る間もなく、

通り過ぎて行く。そんな行き交う人々の安全に気配りしている女性がいる。

横浜駅営業助役 鈴木弥生。彼女は乗客を常に大切に想い、しかも一番身近な存在と考えている。

譲葉の賦

曝書の日

その日は、朝から雲ひとつない晴天だった。勘助と儀八の兄弟は朝食もそぞろに身支度を整え、中瀬村延命地の斎藤家を目指した。

兄弟が斎藤家に到着した時には、既に安兵衛が額に手ぬぐいを巻き、一人大汗をかいて土蔵から書物を運び出していた。

「安兵衛、もう始めちゃったんかい。待っててくれりゃいいのに」勘助はそう声を掛け、自分も額に手ぬぐいを巻き、土蔵の中へと入って行った。そんな兄を目で追いながら、儀八は初めて入る斎藤家の土蔵に一人胸を高鳴らせていた。

「兄さ、本当にこれ全部外に出すんかい！こりゃあ、やがてかかるなあ」「そうさ、去年までは安兵衛と二人だったが今年は三人だし、少しは早く終わらんじゃねえか」そんな会話をしながらも三人はせっせと書物を庭へと運び出し天日に干した。

そう、この日は安兵衛にとって一年に一度の大仕事である斎藤家の曝書の日であった。しかし、儀八にとっては、この大仕事も指折り数えて待つほどに、楽しい行事であった。

桃井可堂伝

なぜなら、この日ばかりは、斎藤家の蔵書を誰はばかることなく見ることができたからである。

陽も西に傾き、作業も終わりに近づいた頃「安兵衛、この辺のものなら借りてもいいか」と尋ねる勘助の声が聞こえた。「ああ、そこのは大丈夫だ。そうだ儀八も持つてくか？」安兵衛は振り返って儀八に訊いた。儀八は思いもよらぬ問いかけに大きく三度頷き、改めて抱えていた書物を見詰めた。

曝書の作業を終えた儀八は家に帰ると、さっそく借り受けた書物の一文字ひとつもじを写し取ることに没頭した。この一年の間、儀八の懐で大切に抱えられていたあの書物も、昨年の今頃、勘助が借りてきた書物を儀八が写した物であった。

八歳になったばかりの幼い儀八が寝食を忘れて写本を続け、世の理を知ろうとするこころした姿に、父守道は「家に余裕があったなら、儀八を名のある先生の下で学ばせ、士人への道を拓くことができたのに、なんと情けない！」と落涙した。

仕事の成果を実感

谷中学校では、3年間剣道漬けの毎日だった。早朝の寒稽古では、流れ星を見ながらの登校だった。辛くはなかった。それは、いつもそばにいた部活仲間が、剣道以上に好きだったからだ。



毎日78万人の乗降客が行き交う横浜駅

大学卒業時の希望職種は、「仕事の成果を、生活の中で実感できる」もの。それが鉄道だった。JR東日本に総合職として入社し、高崎車掌区や本社広報部など、6つの業務を経験した。そうした中で、社員やお客様との会話を通し、人間的に成長できたと実感する。だからこそ、お客様を「身近な存在」と考え、皆の安心できる駅でありたいと思う。

日本の文化を伝えたい

近頃は大言壮語が多く、喧しい。しかし、身近なところを重視してこそ、大きな仕事成し遂げられると思う。

今は管理者として、多くの社員の指導にあたっているが、微笑みながら接客する社員と笑顔で帰られるお客様を見ると、たまに嬉しくなる。

現在の勤務地である横浜は、外国からのお客様が集まる観光の交差点でもある。今は、その人たちにいかに日本の良さを伝え、お帰りいただけるのかを模索している。鈴木にとって、身近な存在である「日本」には、伝えたい素晴らしい文化がたくさんある。それをどうアピールできるのか。鈴木の見点は「身近なもの」に常に優しい。

夢七訓

夢なき者は理想なし
理想なき者は信念なし
信念なき者は計画なし
計画なき者は実行なし
実行なき者は成果なし
成果なき者は幸福なし
ゆえに 幸福を求める者は 夢なかるべからず※